

第2講：61 「廊下の下を」

今回の公開講座では、以下の逸話を紹介した。

明治十一年、上田民蔵十八才の時、母いそと共に、お屋敷へ帰らせて頂いた時のこと。教祖が、

「民蔵さん、私とおまはんと、どちらの力強いか、力比べしよう。」と、仰せになり、教祖は、北の上段にお上がりになり、民蔵は、その下から、一、二、三のかけ声で、お手を握って、引っぱり合いをした。力一杯引っ張ったが、教祖は、ビクともなさらない。民蔵は、そのお力の強いのに、全く驚歎した。

又、ある時、民蔵がお側へ向うと、教祖が、

「民蔵さん、あんた、今は大西から帰って来るが、先になつたら、おなかはんも一しょに、この屋敷へ来ることになるのやで。」と、お言葉を下された。民蔵は、「わしは百姓をしているし、子供もあるし、そんな事出来そうにもない。」と思うたが、その後子供の身上から、家族揃うてお屋敷へお引き寄せ頂いた。

又、ある時、母いそと共にお屋敷へ帰らせて頂いた時、教祖は、

「民蔵はん、この屋敷は、先になつたらなあ、廊下の下を人が行き来するようになるのやで。」

と、仰せられた。

後年、お言葉が、次々と実現して来るのに、民蔵は、心から感じ入った、という。(61「廊下の下を」)

この逸話の特徴の一つは、「力くらべ」と「未来の話」という二つのモチーフが、一つの逸話のなかで同時に語られていることである。「力くらべ」と「未来の話」は、ともに逸話篇にしばしば登場するモチーフであるが、両者に共通する主題は、やはり「月日のやしろ」としての教祖のお立場の強調であろう。

*

『稿本天理教逸話篇』には、教祖の「力だめし」について語った逸話が沢山ある。当日は、次のエピソードを紹介した。

131「神の方には」

教祖は、お屋敷に勤めている高井直吉や宮森與三郎などの若い者に、

「力試しをしよう。」

と、仰せられ、御自分の腕を、

「力限り押えてみよ。」

と、仰せられた。けれども、どうしても押え切ることが出来ないばかりか、教祖が、すこし力を入れて、こちらの腕をお握りになると、腕がしびれて、力が抜けてしまう。すると、

「神の方には倍の力や。」

と、仰せになった。又、

「こんな事出来るかえ。」

と、仰せになって、人差指と小指とで、こちらの手の甲の皮を、お摘まみ上げになると、非常に痛くて、その跡は、色が青く変わるくらい力が入っていた。

又、背中の中真ん中で、胸で手を合わすように、正しく合掌なされたこともあった。

これは、宮森の思い出話である。

このような行動の背景にあるのは、やはり教祖が「月日のやしろ」であることを実感させ、親神の働きを証拠として示すことではなかったろうか。

教祖が「月日のやしろ」であり、その言葉と教えは親神の言葉であり、この世界の真実であることを人々が納得しなくては、教祖が口と筆と行いを通して示されたヴィジョンは、この世界に「陽気ぐらし」を実現していく力にはならないからである。

*

また、この逸話の後半には、現時点では実現していない未来を予見した教祖のエピソードが紹介されている。これもよく似た逸話が、いくつも逸話篇に掲載されている。今回は、次の逸話を紹介した。

175「十七人の子供」

明治十八年のこと。ある日、教祖は、お側の人達に、

「明日は、阿波から十七人の子供が帰って来る。」

と、嬉しそうに仰せになった。

が、その翌日も又翌日も、十七人はおろか、一人も帰って来ない。そのうちに、人々は待ちくたびれて、教祖のお言葉を忘れてしまった。しかし、それから十数日経って、阿波から十七人の者が帰って来た。人数は、教祖のお言葉通り、ちょうど十七人であったので、お側の人人は驚いた。

話を聞いてみると、ちょうどお言葉のあった日に出帆したのであったが、悪天候に悩まされて難航を重ね、十数日も遅れたのであった。土佐卯之助たち一行は、教祖のお言葉を承って、今更のように、驚き且つ感激した。そして、教祖にお目通りすると、教祖は、大層お喜び下されて、

「今は、阿波国と言えば遠いようやが、帰ろうと思えば一夜の間にも、寝ていて帰れるようになる。」

と、お言葉を下された。

こうしたエピソードを通して、教祖と対面した人々は、「月日のやしろ」としての教祖のお立場を確信し、そのお言葉や行いに信を置いていったのであろう。

しかし、上田民蔵氏の場合も土佐卯之助氏の場合も、当人たちが教祖にお会いしたい、教祖の思召に応えたい、と考えて自ら行動していったからこそ、教祖の予見は実現したのである。阿波国から帰参した一行が、悪天候を理由に引き返していれば、教祖のお言葉が実現することはなかったし、「帰ろうと思えば一夜の間にも、寝ていて帰れるようになる」というお言葉も、後世に残されることはなかっただろう。

上田民蔵氏の場合も、教祖のお言葉を糧として信心を深めていったからこそ、「家族揃うてお屋敷へお引き寄せ頂くことになったのである。「廊下の下を人が行き来するようになるのやで」というお言葉は、純粋に未来を予見した言葉のようにも思えるが、教祖に導かれた人々（上田民蔵氏を含む）が、各地で教えを伝えるために必死に奔走したからこそ、廊下の下を人が通るような姿が実現していったのである。

黙って見ているだけでは、決して何も実現することはない。教祖に導かれた人々が、精一杯毎日の勤めを真摯に積み重ねてきたからこそ、教祖の予見は実現し、教祖が「月日のやしろ」であることが、真実であると証されてきたのである。このことを忘れてはならないだろう。

*

さらに当日の公開講座では、深谷忠政『天理教（だめの教え）』道友社（286～287頁）及び『先人の遺した教話（3）根のある花・山田伊八郎』道友社（68～70頁）から、教祖が伝えられた「陽気ぐらし」の具体的なヴィジョンを紹介した。紙幅の都合でここでは紹介できないが、そこで語られている「陽気ぐらし」の世界は、決して現実からかけ離れてはいない。すぐにも手が届きそうでありながら、決して手の届かない理想の世界。

こうした理想の世界の現実的なイメージを与えられることで、はじめて人は、理想の実現への道を着実に歩み始めることができるのである。